

# 日本人が有するパフォーマンスとしての「間(ま)感覚」の 一断面に関する実験研究の報告

—少林寺拳法の演武における「動と静の時間的な対比」からのアプローチ—

新山王 政 和  
(音楽教室)

市 瀬 香 織  
(愛知教育大学大学院)

Masakazu SHINZANOU Kaori ICHISE

## はじめに

日本人が有する「間」の感覚について考える時、これまでは「日本音楽」の一つを取り上げて、その曲中における「無音」の取り扱われ方について論ずることが多かったように思われる。しかし今回、あえてこの「日本音楽」の領域から離れ、個人単位、二人ないし三人組、そして八人以上の集団によって行われる少林寺拳法の演武を取り上げて、その中の「動き」と「静止」の時間的な対比に注目して分析することによって、日本人が有するパフォーマンスとしての「間の感覚」の一つの断面について実験的にアプローチを試みたので、その結果について報告したい。

### 1. 日本人にとっての「間(ま)」とは

「間(ま)」とは、日本人独特の感覚であると言われることが多いのだが、実際には日常の生活において我々がこの「間」について直接意識しながら暮らすことは希であろう。しかし、この「間」という言葉について、我々は多くのことを感じる。この「間」の意味について、最も一般的な例としては広辞苑に次のように多くの説明文が列挙されている<sup>1)</sup>。

- ①物と物、または事と事のあいだ。あい。イ、あいだの空間。ロ、あいだの時間。
- ②長さの単位。イ、家など、建物の柱と柱とのあいだ。けん。ロ、畳の寸法にいう語。
- ③家の内部で、屏風・ふすまなどによって仕切られたところ。イ、へや。ロ、坪。ハ、部屋の数数を数える語。
- ④日本の音楽や踊りで、所期のリズムを生むための休拍や句と句との間隔。転じて、全体のリズム感。
- ⑤芝居で、余韻を残すために台詞(せりふ)と台詞との間に置く無言の時間。
- ⑥ほどよいころあい。おり。しおどき。機会。めぐりあわせ。
- ⑦その場の様子。具合。ばつ。
- ⑧船の泊る所。ふながかり。

一方、これら多くの「間」の意味について、末利光は著書「間の美学—日本的表現」において、次のように整理している<sup>2)</sup>。「時間、昼間(夜間)、間食、間断な

く、間が悪い、間が持てない、間髪を入れず・・・といった時間的な間、つまり「時の間」に関するものと、空間、間隔、間口、中間、広間居間・・・といった空間的なひろがり、つまり「距離や面」に関するもの。そして、どちらともつかない得体の知れないもの。世間、間者(間諜)、人間・・・など、何だかつかみどころのない、得体の知れないものを日本人は「間」の字をあてて片づけています。—中略—その他に、間居、間話(間談)といった静けさを表すものもありますが、これも前の項目に入れてしまうとすれば、大体次の三つに分類されます。1「時の間」、2「面の間(距離も含んで)」、3「そのどちらともつかぬ、得体の知れぬ第三の間」

しかしここで、これらの「間」について記された多くの意味の中には、ある一つの共通点をあげることができることに気付く。つまり、「間」とは、人と人、あるいは物と物のように、常に主体に対する客体、要するに対象物を必要としている点である。

一方、芸術的な意味における「間」を体得することについては、西山松之助が著書「芸の世界」において次のように述べている<sup>3)</sup>。「間というものは、芸の世界においては空間構成の問題、時間の切り方の問題、たとえば音楽の拍子であるとかいうものはきわめて微妙に展開されていくわけで、それを体得することはきわめてむずかしいことである。」

さらに「間」に関する美意識について、南博はその著書「間の研究—日本人の美的表現」において次のように言及している<sup>4)</sup>。「間の美意識は、時間的・空間的に切断した場合の一定の距離感によって成立する。—中略—間は、時間的・空間的に切断された距離感が、独特の断絶によって創出された、時間でも空間でもない美意識である。」と説明し、さらに川口秀子の言葉、あるいは永井啓夫の言葉を引用しながら、その「間」の美的な意識について、「一人ひとり違うもの、つまり個性のようなものであり、他人から教えられただけで簡単に体得できるようなものではない。」と論を進めている<sup>5)</sup>。

ところで今回取り上げた少林寺拳法に最も関連の深い武道の分野においては、その「間」をどのように捉えているのであろうか。宮本武蔵が著した「五輪書」

の中に、次のような興味深い一文が見られるそうなので、簡単に紹介しておきたい<sup>6)</sup>。「まず、よく合う拍子を知り、その上で合わぬ拍子をわきまえ、大小遅速のなかでも、適合した拍子、間合い、逆の拍子を知ることができなくては、兵法を確実なものとするにはできない。」

このように、「日本人固有の美意識の一つ」とされ、しかも様々な分野にまたがって多くの意味をも持ちながら、これまでその実体について客観的に分析される機会があまり多くなかった「間の感覚」について、今回、あえて音楽の領域から離れて、少林寺拳法の演武における時間的な「間」の取り方に焦点をあてて、その一断面について分析を試みてみたい。

## 2. 少林寺拳法の演武と、演武における「間」

今回取り上げた少林寺拳法とは、1947年に香川県多度津町で「宗道臣」によって創始された純粋に日本の武道であり、中国の嵩山少林寺に源を発する中国武術の「少林拳術」や「少林拳」、「少林拳法」とは異なるものである<sup>7)</sup>。そして演武とは、もともとは技を練習する際に二人ずつ組んで練習を行った「組手主体」に端を発しており、そこには「自分が上手になるためには相手にもうまくなってもらう必要がある。」という、互いに相手をたて、協調性を養うという理念が込められていた。そしてそれは、一人で技を披露する「単独演武(単演)」、二人から三人組で行う「組演武(組演)」、八人以上の集団で行う「団体演武(団演)」へと発展していった。つまり、少林寺拳法の演武は、技の練習を演武の形式で行うことに意味を持っているのである。その後、この演武は一般にも公開されるようになり、今日では公開演武会や競技会なども盛んに行われるようになってきている。

先に述べたように、本来、演武とは技の練習を演武の形式で行うことに意味を持っていたのであるが、公開演武や競技会においては演ずることを意識して行われていると感ずることも多い。この演武は次の三つの要素によって一つのフレーズが構成されている。

- ① 2～3種類の法形(一連の技)を組み合わせた技の固まり。以後「動作」と略す。
- ② フレーズとフレーズの間には「残心」と呼ばれる静止した状態がある。
- ③ 姿勢や配置を変えたり、次のフレーズに移るための動き。以後「余分な動き」と略す。

そして、このフレーズを5個ないしは9個程度組み合わせ、一つの演武が構成されている。

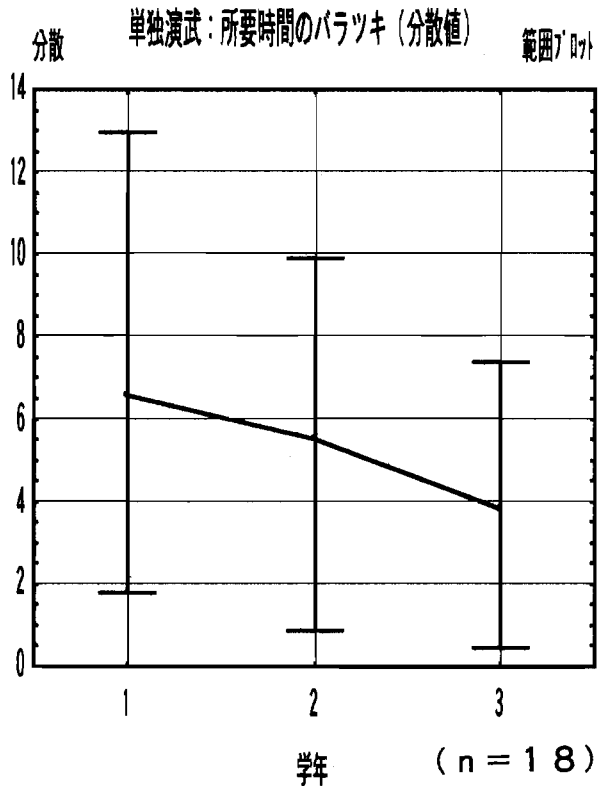
今回の分析では、この三つの構成要素の中から②の「残心」と呼ばれる静止した状態を、少林寺拳法の演武における「間」として捉えて、組演武と団体演武における「間」の取り方について分析を試みた。

## 3. 少林寺拳法の演武における時間的「間」の分析

### 3.1 単独演武に見られる演武の時間的安定化について

A大学の少林寺拳法部員を対象にアンケート紙を用いて事前に行った調査によると、経験の浅い部員ほど残心(間)を意識し、その残心の取り方に苦勞していること、そして経験年数が増えるにしたがって、その残心(間)を意識しなくなることが分かっている<sup>9)</sup>。この結果を踏まえた上で、残心(間)の取り方の違いについて調べるために、1年から3年までの部員18名に協力を依頼し、単独演武の一つである「天地拳一系から二系」を、日を変えて5回行ってもらい、それぞれに要した時間を計測した。実験は一人ずつ個別に単独演武を行い、それをビデオに記録した後、ビデオ映像をもとに計測する方法を用いている。その結果、一人ひとりの単独演武全体にかかる所要時間に個人差はあるものの、一回一回の所要時間のバラツキについて分散を求めて比較すると、学年ごとの分散値の平均は、1年生:6.5653, 2年生:5.5018, 3年生:3.8064となり、明らかに経験年数が増えるにしたがって残心(間)の取り方が一定で、演武の所要時間が安定することを確認した。なお、その結果をグラフ1に示しているので参照されたい。グラフの縦軸は分散値を、横軸は学年を表している。

\* グラフ1 「単独演武：所要時間のバラツキ(分散)」



つまり、演技者自身が無意識に行っているにもかかわらず、経験年数が増えるにしたがって、一回一回の演武にかかる時間的なバラツキは減少することが明らかにされた。これは、「人はそれぞれ固有のテンポを保持している」というパーソナル・テンポに関する先行研究の結果を支持するものであろう<sup>10)</sup>。

しかし、個人単位で行われる単演の分析だけでは、経験を重ねることにより一人一人の「間」の取り方が時間的に安定することを確認することはできても、第三者、あるいは複数の人間の間で、その個々の「間」の違いをどのように互いに察知し合いどのように調整し合うのか、あるいは集団においてはどの程度の「間」の取り方を最も自然な「間」であると感じ、また心地よいと感ずるものなのかを知ることはできない。つまり「間」の取り方の普遍性や傾向と言ったものを分析することはできないのである。言うまでもなく、「間」の感覚とは各個人単位で考えられることが多いのだが、今、ここで我々が強く関心を抱いたのは、複数の人間の間で行われる「間の取り方」の調整作用や協調作用である。その理由は、これらは教育現場における合唱や合奏などのアンサンブルの指揮や指導をする際だけではなく、朗読や音読においても、どのような「間」の取り方が最も自然であり適切であるか、また聞き手にとって心地よいのか、逆にその「間」より意図的に逸脱することによって緊張感を醸し出したり注意を喚起することができるのか、というような問題にも有益な示唆を与える可能性があると思われたためである。よって、この時間的な「間」の取り方の普遍性や傾向と言ったものを調べるために、二人ないしは三人組で行われる「組演武」と、八人以上の集団で行われる「団体演武」の中に見られる動きの部分と静止状態の部分の対比に注目してさらに分析を試みた。

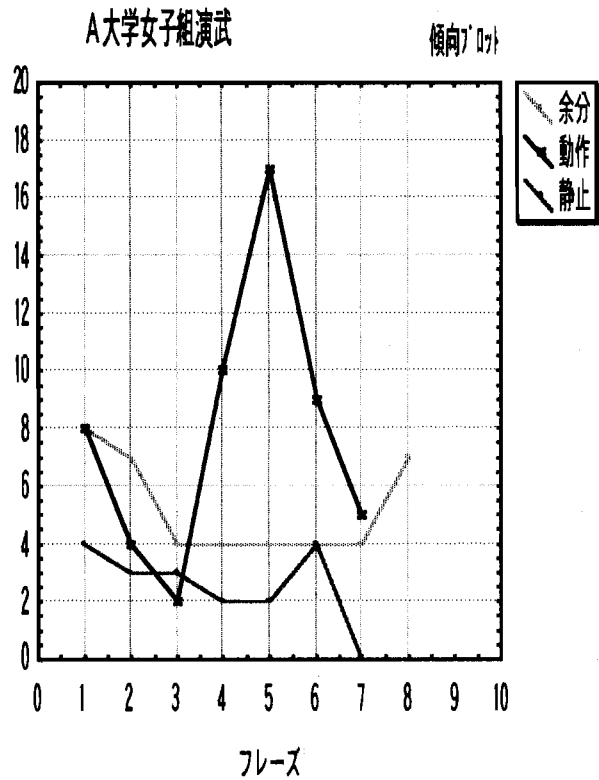
### 3. 2 組演武に見られる「動」と「静」の対比

時間的な「間」の取り方の普遍性や傾向を分析するために、二人ないしは三人組で行われる「組演武」の中に見られる「動作（法形：技のかたまりの部分）」と「静止状態」の二つを取り上げて、その対比に注目して分析を試みた。

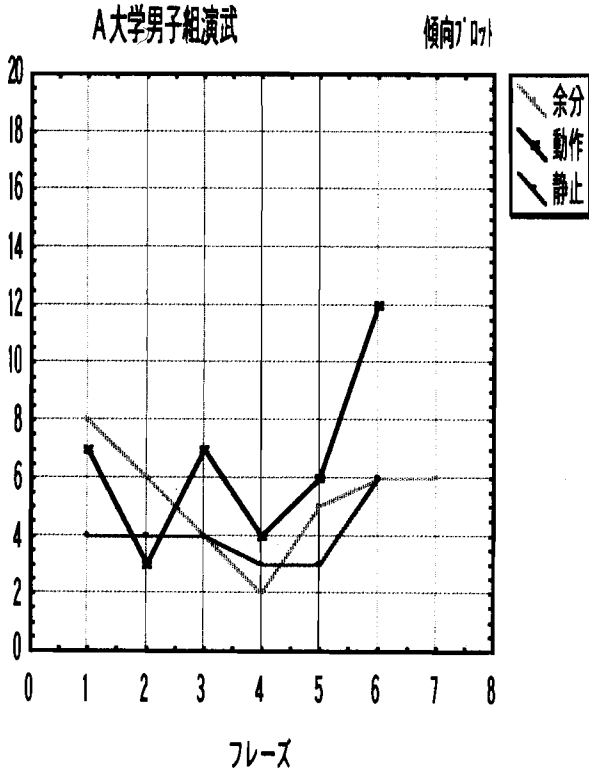
まず、A大学女子組演武、A大学男子組演武、全日本少林寺拳法大会で最優秀を受賞した組演武（以下、全日本最優秀組演武と略す）、本山師範による奉納組演武（以下、奉納組演武と略す）の4種類の組演武について、「余分な動き」「動作（法形）」「静止した状態」を一つひとつ計測した。実験は各団体ごとの組演武をビデオに記録した後、ビデオ映像をもとに計測する方法を用いている。その結果はグラフ2からグラフ5に示したが、各グラフともに縦軸が秒数を横軸がフレーズの回数を表している。これによるとA大学女子組演武、A大学男子組演武、全日本最優秀組演武の場合は、

「動作」の所要時間の長短を組み合わせて、変化に富んだ演武を構成していることが分かる。一方、奉納組演武だけは「静止」部分の起伏が非常に富んでいることに気づく。これは冒頭に紹介した宮本武蔵の言葉、「まず、よく合う拍子を知り、その上で合わぬ拍子をわきまえ、大小遅速のなかでも、適合した拍子、間合い、逆の拍子を知ることができなくては、兵法を確実なものとすることはできない。」に則ったものであろう<sup>11)</sup>。つまり、「間」を身につけるためには先ず枠に入ることを学び、それを身につけた後は、それより外れることによって、真の意味において「間」を体得することができるということを意味したものであろう。これについて我々は、これまで「型に入り、型より出づ」という言葉に代表されるように経験的には理解していたのだが、今回それを客観的な立場からデータにもとづいて確認することができたと言えよう。

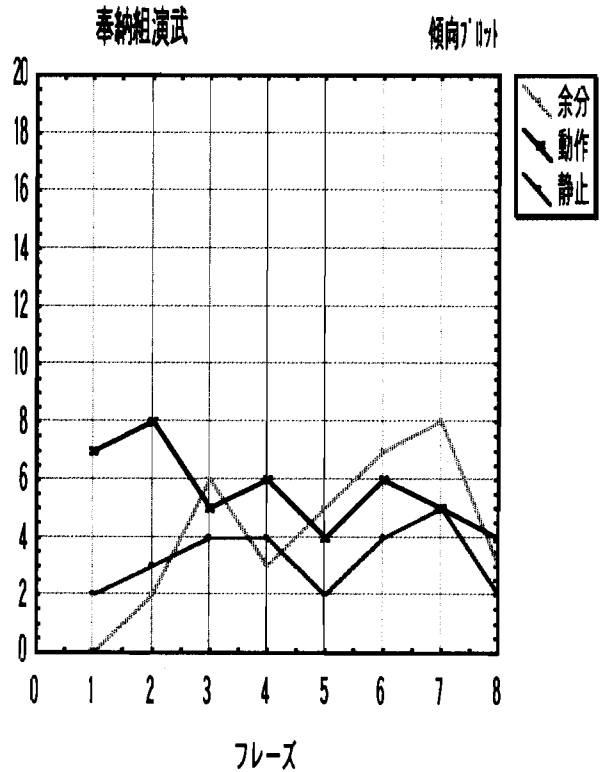
\* グラフ2 「A大学女子組演武」



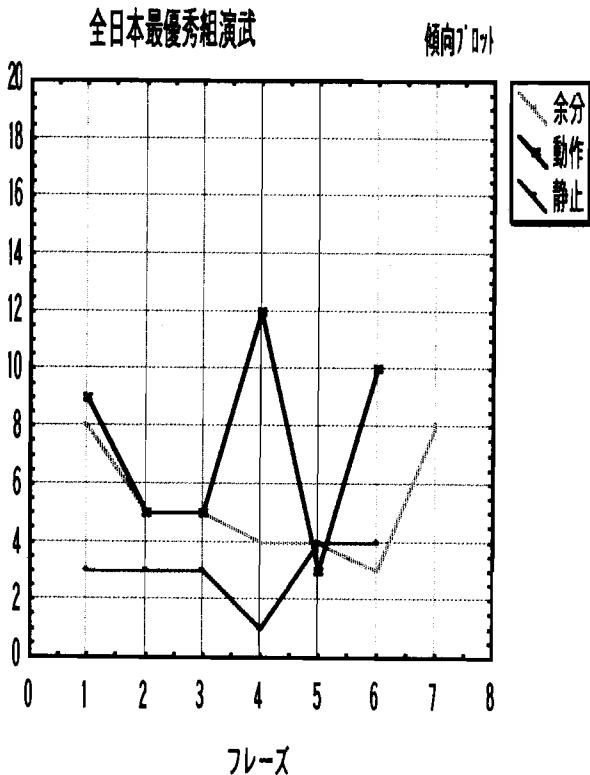
\* グラフ 3 「A大学男子組演武」



\* グラフ 5 「奉納組演武」



\* グラフ 4 「全日本最優秀組演武」



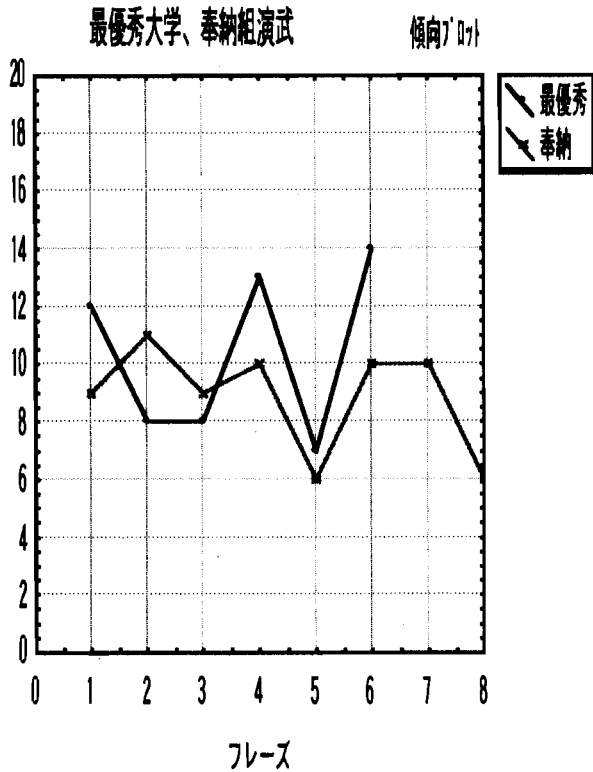
次に、各フレーズの中から「動作」と「静止」の構成要素だけを抜き出して加算し和を求めたものが次のグラフ6とグラフ7である。いずれも縦軸が秒数を、横軸がフレーズの回数を表している。

これによると、最優秀大学組演武の場合「動作」に「静止」を加えた所要時間が13秒と8秒を中心として、奉納組演武の場合も10秒と6秒を中心にして上下1秒ずつの範囲内に全ておさまっており、その構成はそれぞれ次のように表すことができる。

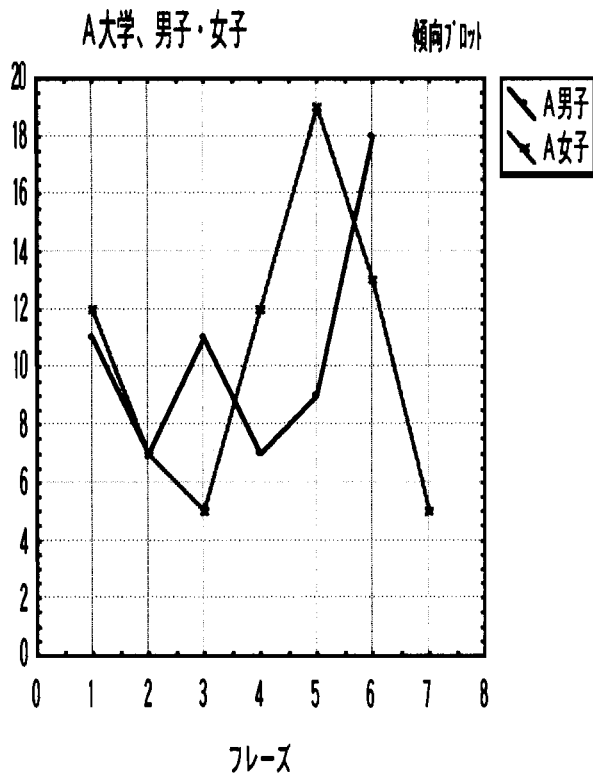
- ・最優秀大学組演武：LSSLSL (L=13秒, S=8秒)
- ・奉納組演武：LLLLSLLS (L=10秒, S=6秒)

しかしA大学女子組演武、およびA大学男子組演武には、ともにそのような規則性や均一性は見られず、不規則であることが分かる。このことから、競技会で高い評価を受けた大学の組演武や本山師範による組演武などでは、一つひとつの動き（動作）や間（静止）が一見不規則に思われても、その二つの構成要素を組み合わせた上で、その均一化や統制化が行われているものと推察することができる。

\* グラフ6 「最優秀大学・奉納組演武」



\* グラフ7 「A大学、男子・女子」



### 3.3 団体演武における「動」と「静」の対比

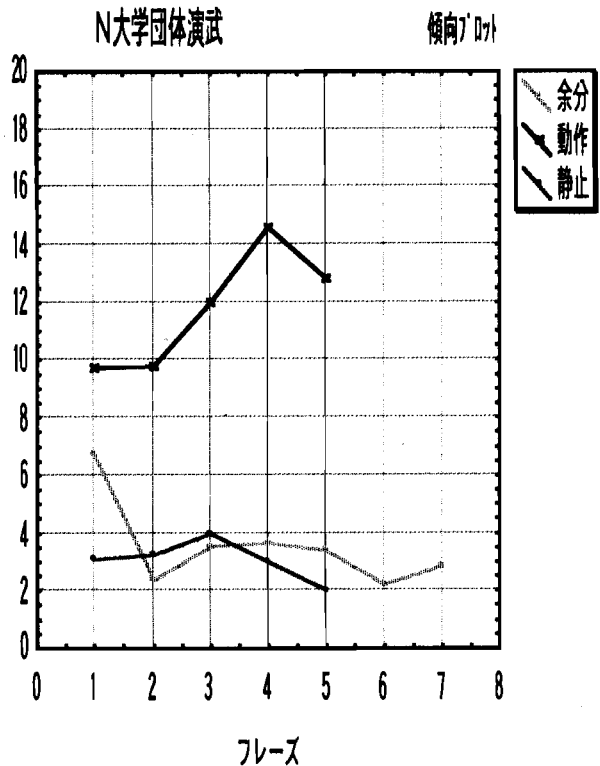
次に、同じように時間的な「間」の取り方の普遍性や傾向を分析するために、八人以上の集団で行われる「団体演武」の中に見られる「動作（法形：技のかた

まりの部分）」と「静止状態」の二つを取り上げて、その対比に注目して分析を試みた。実験は各団体ごとの団体演武をビデオに記録した後、ビデオ映像をもとに計測する方法を用いている。その結果はグラフ8からグラフ11にまとめているが、いずれも縦軸が秒数を横軸がフレーズの回数を表している。

まず、N大学団体演武、S大学団体演武、A大学団体演武の3種類について、「余分な動き」「動作」「静止した状態」を一つひとつ分析した。

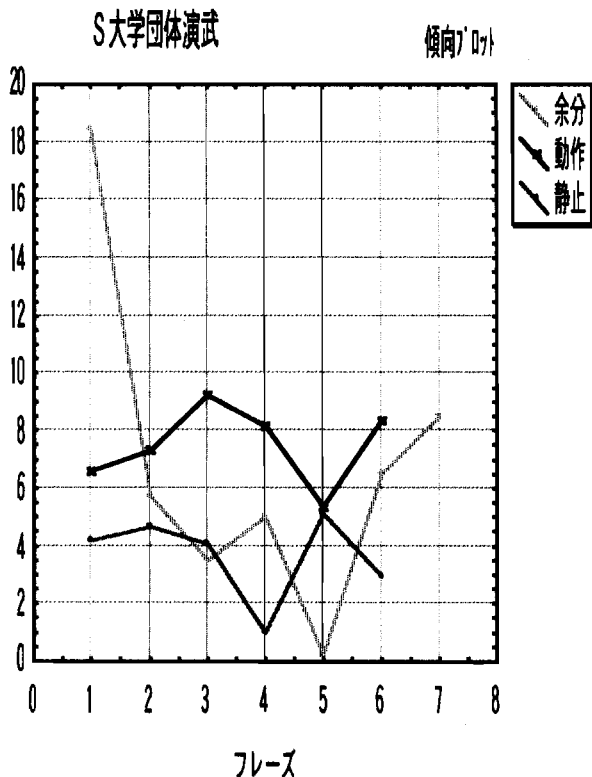
グラフ8に示したN大学団体演武の特徴は、静止の状態、つまり「間」が極めて規則的に取られていることであり、その所要時間の平均は3.064秒、標準偏差は0.6936であった。この標準偏差の値は、S大学団体演武の1/2以下、A大学団体演武の1/3以下であり、他の2大学の団体演武に比べてN大学団体演武の「間」がいかに統制され、安定しているのかということの意味している。

\* グラフ8 「N大学団体演武」



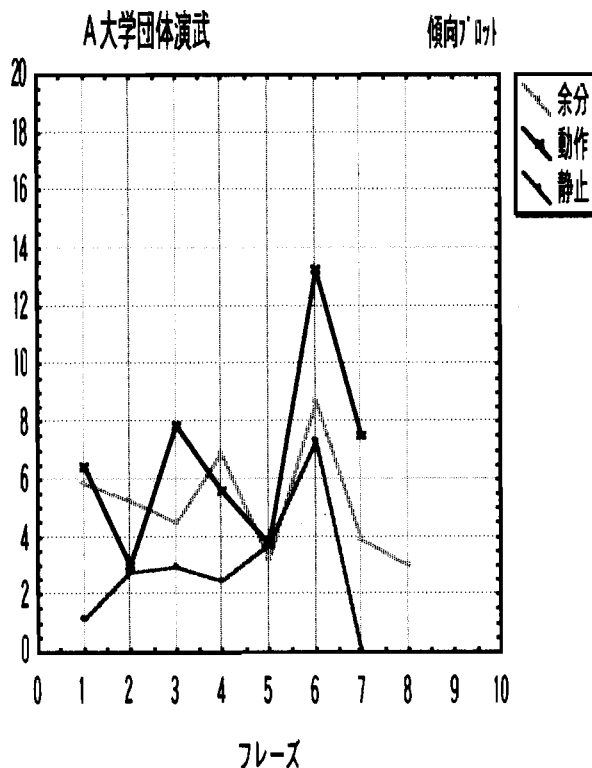
グラフ9に示したS大学団体演武は、余分な動きの所要時間の推移に目をひかれる。開始と同時に18秒間も取られた後、一気にその秒数を減らして、最後に8秒間の余分な動きをおいた後に演武が終了している。このS大学団体演武の場合、余分な動きが演武全体を特徴づけるキーポイントであると思われる。

\* グラフ9 「S大学団体演武」



グラフ10に示したA大学団体演武の場合は、三つの構成要素の組み合わせに工夫は見られるものの、他の大学の団体演武に比べると単調な印象を抱いてしまう。つまり、動作が長ければその後の静止時間も長くなり、余分な動きも長くなるというように、三つの構成要素の所要時間の長短が互いに連動してしまっている。

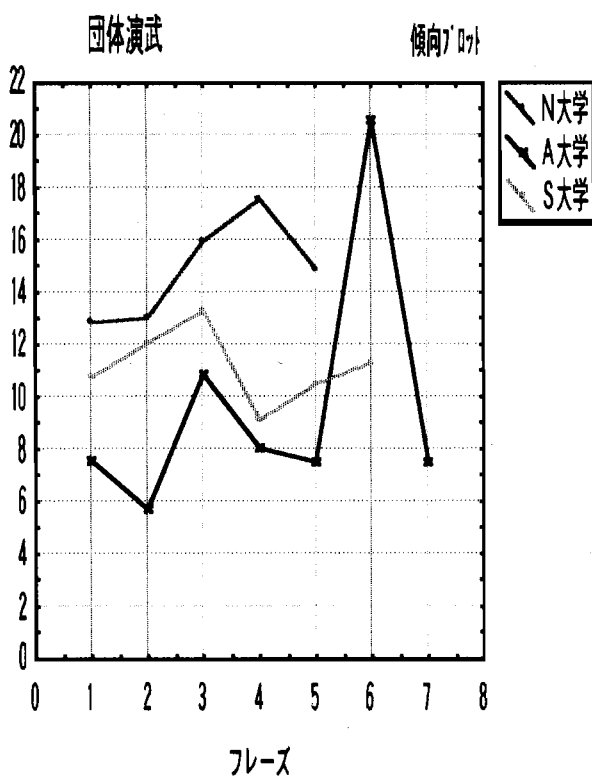
\* グラフ10 「A大学団体演武」



さらに、組演武の場合と同じように、各フレーズの中から「動作」と「静止」の構成要素だけを抜き出して加算し和を求めたものが次のグラフ11である。これまでと同様に、グラフの縦軸が秒数を横軸がフレーズの回数を表している。

それによると、組演武の場合ほど均一化は見られないものの、N大学団体演武の場合、「動作」に「静止」を加えた所要時間が15秒と13秒を中心にして取られており、S大学団体演武の場合も12秒と10秒を中心にして取られていることがわかる。しかしA大学団体演武の場合、突然20秒を越す所要時間が現れたりして、極めて不規則な状態である。このことから、競技会で高い評価を受けた大学の団体演武では、一つひとつの動き（動作）や間（静止状態）が一見不規則に思われても、その二つの構成要素を組み合わせた上で、その均一化や統制化が考慮されているものと推察される。また、N大学団体演武の場合における極めて規則的な「間」の取り方、あるいはS大学団体演武の場合における余分な動きの特徴的な取り方などのように、団体によって演武全体を特徴づけるキーポイントを工夫し、設定しているものと推察される。

\* グラフ11 「団演（動作+静止）」



### 3.4 「静止の状態（間）」について

最後に、組演武と団体演武について、それぞれの「静止の状態」だけを取り出して分析を試みた。

その結果、組演武の場合の「静止」の所要時間の平均は3.2053秒、標準偏差は1.1882であり、団体演武の

場合の「静止」の所要時間の平均は3.2114秒、標準偏差は1.5036であった。これら組演武と団体演武を合わせた全体の「静止」の所要時間の平均は3.2079秒、標準偏差は1.3234になる。

ところで、この時間的な「間（静止状態）」については、個人における音楽演奏レベル、および音楽聴取レベルでの実験において次のことが確認されている。

①演奏のテンポが異なっても「ちょうど良い」と感じられる時間の長さには大きな差はない 一略一。したがって「ちょうど良い長さ」は拍子やリズム等の音楽構造で決定されたのでないといえる。知覚上、ちょうど良いと感じられる「間」の長さが存在し、それが演奏者の長さを決定したと考えられる<sup>12)13)</sup> 一略一。

②一略一 曲の聴取時における呼吸が平均2.8秒/回になったこと、ならびに、呼気から吸気、或いはその逆の変化点がこのフレーズの切れ目における演奏時間と同期する傾向が見られたことにより、「間」の知覚と呼吸との関係が確認された<sup>14)</sup>。

このように、個人による音楽演奏・聴取レベルの「ちょうど良い間」は呼吸と深く関連しており、その時間は平均2.8秒であるということ、そして複数の人間による少林寺拳法の演武の「間」の平均時間が3.2079秒であることから、演武の「間」と呼吸との間にも何らかの関連の存在する可能性が示唆されている。

## ま と め

今回の実験結果を次のように整理しておきたい。

①単独演武の実験結果から、武道の習法の一つであった演武においても、経験年数が増すにつれて「間」（静止状態）の取り方が一定になり、演技者自身が無意識に行っているにもかかわらず、所要時間のバラツキが減少する。この分析結果は、冒頭に引用した「それ（間）を体得することはきわめてむずかしいことである<sup>15)</sup>。」という記述とはやや矛盾するような印象を抱かせる。しかし、「間」の知覚に関する先行研究の報告や<sup>16)</sup> パーソナル・テンポの概念<sup>17)</sup> そして今回の分析結果を総合して鑑みると、前述した「その『間』は一人ひとり違うもの、つまり個性のようなものであり、他人から教えられただけで体得できるものではない<sup>18)</sup>。」という表現に沿ったものであることが分かる。つまり、「知覚上心地よい間」にはある程度の普遍性がみられるものの、それは一人ひとり異なる固有のものであるため、自分自身でそれに気づき、自覚することができない限り、他人から教えられたり模倣したりすることのみにより体得できるものではないということである。具体的には、その「間」を身につけるためには、先ず枠に入ることを選び、それを身につけた後に、今度は自らの意志にもとづいて意図的にそれより外れることができ

るようになって、初めて真の意味での自分自身の「間」を身に付けることができるのだ、ということの意味した「型に入り、型より出づ」という言葉に則ったものであろう。これについて我々は、これまで経験的には十分知っていたと思われるのだが、今回、そのことをデータにもとづいて客観的な立場から確認することができたものと思われる。

②本来、少林寺拳法の演武には統制美の概念がなかったにもかかわらず、高い評価を受けた組演武は、一つ一つの構成要素が一見不規則に見えても、動き（動作）と間（静止）の二つの構成要素を組み合わせた上で、その均一化や統制化が行われていた。団体演武も同じように、各構成要素が一見不規則に見えても、動きと間の二つの構成要素を組み合わせると均一化や統制化が考慮されており、さらに団体ごとに全体を特徴づけるキーポイントを設定する工夫がみられた。つまり組演武や団体演武においては、本来の演武の姿を離れて、明らかに第三者に見せることを意識した上で演武が構成され、行われていたと言えよう。

③全ての演武における「間」として捉えられる静止状態の時間の平均は3.2079秒であった。これは、個人による音楽演奏・聴取レベルの時間的な「間」と呼吸との関係を確認した先行研究の報告に近い値である。よって、集団による演武の「間」についても、その「間」の取り方と呼吸との間には何らかの関係が存在している可能性を否定できない。その確認の作業が、今後の新たな課題であろう。

今回の実験研究の結果、この複数の人間同士の間で行われる「間の取り方」の調整・協調作用は、前述したとおり、教育現場において合唱や合奏などのアンサンブルを指揮したり指導する際だけではなく、朗読や音読の練習などにおいても、どのような「間」が最も自然であり適切であるのか、また聴取者に心地よいと感じられるのか、逆にその「間」から意図的に逸脱することによって緊張感を醸し出したり注意を喚起することができるのか、というような問題に対しても有益な示唆を与え得るものと思われる。つまり具体的には、一つの曲から次の曲へ移るとき、あるいはフェルマータの後に音楽を再開する場合に、その間を何秒くらいに設定すると演奏者や聴取者にとってより自然に感じられるのか、あるいはその「心地よい」とされる「間」の長さより意図的に短く、あるいは長くすることによって演奏者や聴取者に対して緊張感を与えたり注意を喚起し集中させることができるのか、というようなことが考えられる。よって今後は、この分野においてもさらに研究を深めていきたい。

[追記] 本研究では、実験の実施とデータの基礎分析

を市瀬香織が担当し、データの分析と考察および本文の執筆を新山王が担当した。なお本論文は、日本音楽知覚認知学会平成10年度研究発表会（慶応大学）において口頭発表したものに加筆・修正したものである。

注、および引用文献

- 1) 新村出編著,「広辞苑」第三版, p.2232, 岩波書店, 1983
- 2) 末利光,「間の美学—日本的表現」, p.83, 三省堂, 1994
- 3) 西山松之助,「芸の世界—その秘伝伝授」, p.24, 講談社, 1980
- 4) 南博編,「間の研究—日本人の美的表現」, p.118, 講談社, 1983
- 5) 前掲書3, p.172, およびp.218
- 6) 吉田豊編,「武道秘伝書」, p.142, 徳間書店, 1971
- 7) 少林寺拳法五十年史刊行委員会編著,「少林寺拳法五十年史」第一部正史, p.2, 財団法人少林寺拳法連盟, 1997
- 8) 財団法人少林寺拳法連盟編著,「少林寺拳法」副読本, p.10, 財団法人少林寺拳法連盟, 1992
- 9) 市瀬香織,「日本人の間感覚について—少林寺拳法の演武を通じて—」, 平成9年度愛知教育大学音楽教室卒業論文, 1998
- 10) Darrel Lee Walters, “The Relationship Between Personal Tempo in Primary-Aged Children and Their Ability to Synchronize Movement with Music”, Council for Research in Music Education Bulletin No.88, pp.85, School of Music University of Illinois, 1986
- 11) 前掲書6
- 12) 中村敏枝,「演奏時間における楽譜からの逸脱—間の知覚との関係(2)—」, 日本音響学会昭和63年度秋季研究発表会発表論文集, p.459, 日本音響学会, 1988
- 13) 中村敏枝,「フレーズの最後の長い音符の演奏時間—間の知覚との関係—」, 第1回音楽知覚認知国際会議発表講演論文要約集, p.28, 日本音楽知覚認知研究会, 1989
- 14) 中村敏枝,「音楽聴取時の呼吸—間の知覚との関連—」, 音楽心理学年報1989, p.27, 日本音楽心理学音楽療法懇話会, 1989
- 15) 前掲書2
- 16) 前掲書12, 13, 14
- 17) 前掲書10
- 18) 前掲書3

(平成10年8月12日受理)